ごあいさつ

風間サチコ（1972年生まれ、東京都在住）は、「光州ビエンナーレThe Eighth Climate (What dese art do?)」（2016年）、「ヨコハマトリエンナーレ2017 島と星座とガラパゴス」（2017年）等、多くの展覧会で精力的に作品を発表してきました。昨年、原爆の図丸木美術館で開催された個展「ディスリンピア2680」（2018年）では大きな注目を集め、今年3月には「Tokyo Contemporary Art Award 2019-2021」を受賞し、益々その活動に期待が寄せられている作家です。

風間は、黒一色の濃淡で表現された木版画を主に制作しています。近現代の社会的な事象への関心を起点として、その根源や本質を、いくつもの過去の事例を参照することで露にしていきます。批判的な精神を持ちながらも、コミカルな表現や独自の物語世界を構築することで、感傷的なところからは距離をとる姿勢が貫かれています。

本展では、建設による近代的な「新秩序」の誕生を浮き彫りにすることが試みられます。その主柱となるのは、新作《クロベゴルト》（2019年）です。コンクリートを利用した土木技術の発展で、人間は神のように自然をデザインしてきました。そうして創出された新な秩序が大きなテーマとなっています。作家はその最たるもの象徴を、山間に荘厳として設置された「ダム」に見出し、かつ日本の近代化の歴史の縮図が見られるものとして、黒部川の開発に着目しました。その発展の歴史に、神々になぞらえて人間のエゴや支配欲を描いた楽劇「ラインの黄金」を重ねて作品としました。

　併せて、生命の統制と新世界建設を大きなテーマとした《ディスリンピック2680》（2018年）、経済活動のための自然開発の陰影に着眼した《ガソリンで見た夢》（2001年）、《ダイナマイトは創造の父》（2002年）を展示します。個々のテーマの中に、近代的な価値観が反映されているでしょう。

また、このような近代史の「影」が、黒部川第三発電所建設を支えた労働者達に焦点を当てた新作《ゲートピアno.3》（2019年）によって開示されます。近代化の光と影を白黒の木版画に映し出す、壮大な作品世界をご鑑賞いただけましたら幸いです。

　最後になりましたが、黒部市美術館開館25周年の本展を開催するにあたり、風間サチコ氏をはじめ、多大なご協力を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

2019年10月　黒部市美術館